

巻頭言 「藤田嗣治とカール・バルト」

宇野 元

ある年の秋、家族が芦屋にそろったとき、県立美術館の藤田嗣治展を見にゆきました。手元にあるわずかな画集のなかに、なぜか、1977年の藤田展のカタログが含まれています。当時、西武美術館をはじめ、デパートでの美術展が流行していて、新宿小田急百貨店で開催されたときのものです。カタログとはいえ、書籍と変わらないしっかりした造りと内容があります。久しぶりに藤田を見にゆく機会に、それまでまじめに読まなかった彼の詳しい履歴と、カタログに寄せられた諸氏の文章を味わうことにしました。

すると、生まれた年と亡くなった年が、カール・バルトとぴたり重なっているではありませんか。心がときめきました。二人は1886年に生まれ、1968年に亡くなっています。藤田は、日本人ではかなり早い時期に渡欧した一人であり、爛熟期のヨーロッパをじかに体験しています。それは、青年バルトが吸っていた空気とおなじものでした。そして彼らは世界大恐慌、二つの世界大戦、さまざまなイデオロギーの台頭と対立など、激動の時代を生きぬきました。

また、ふたりは生前から評価された一方で、身内の間では必ずしも理解されませんでした。誤解や偏見に晒されたのも共通しています。藤田は長く日本での評価が定まりませんでした。バルトも、はやくから外国で認められ、ルター派やカトリックのなかに理解者を得たにもかかわらず、母国スイスでは敬われず、彼の教派である改革派において過剰な批判を受けました。現在から眺めると、ふたりとも世界的な存在だったことがわかります。時の流れに洗われ、彼らのまわりを取り囲んでいた多くのものがすぎさって、いま、あとの時代の私たちは、同時代人よりもよく見える時点に置かれています。

もうひとつ、40年前のカタログを読みふけりながら私の心がときめいたのは、藤田が人生を愛したことが、親しい人たちの証言からあらためて確認できたからです。ふたりはよく仕事をし、困難な時期も明るい心を失いませんでした。

藤田嗣治の茶目っ気は、その作品に滲みでています。

かたや、カール・バルトには勇気と快活さがあふれています。それは彼の持ち前だっただけでなく、キリスト者の自覚に裏付けられていました。こんな彼の言葉があります。「キリストの復活の知らせを聞いた者が、悲劇的な面持ちで、あちこち駆け回るのは矛盾している。望みなく、ユーモアを忘れてすごすのは似合わないな。」